

海が揺れた、土地が揺れた、  
そして心も――。

# 願 揺らぎ

監督・撮影・編集  
我妻和樹

前に進むために後ろを振り返り、  
また前を向くもうまくは歩けず。  
あるとき自分たちが選んだ道は正しかったのか。  
被災地の人びとが生きた証の、ほんの一部の記録。



## 本物のドキュメンタリスト

— 土井敏邦 (映画監督)

## 重量級の存在感

— 小原啓 (テレビディレクター)

我妻和樹監督『願いと揺らぎ』は、震災時にそこに居合わせてしまった若い作り手自身の想いを率直に吐露する側面を持ちつつも、それが丹念な民俗学的観察のまなざしと

溶け合うことで**稀有な傑作**となった。

本作を通して私たちは、「絆」と呼ばれたものが具体的に何だったのかを教えられるだろう。

## 震災から6年後の

**決定的な成果**ではないだろうか。

— 三浦哲哉 (映画評論家)

宮城県南三陸町の小さな漁村「波伝谷」<sup>はつたか</sup>。その震災までの3年間の日常を追ったドキュメンタリー映画『波伝谷に生きる人びと』から1年後が舞台の本作では、映画の冒頭、荒涼とした波伝谷の風景が映し出される。

津波によって集落が壊滅し、コミュニティが分断された波伝谷では、ある若者の一声から地域で最も大切にされてきた行事である「お獅子さま」復活の機運が高まる。それは先行きの見えない生活の中で、人びとの心を結びつける希望となるはずだった。

しかし波伝谷を離れて暮らしている人、家族を津波で失った人、さまざまな立場の人がお獅子さま復活に想いを寄せる一方で、集落の高台移転、漁業

の共同化など、多くの課題に直面して足並みは一向に揃わない。震災によって生じたひずみは大きく、動けば動くほど想いはすれ違い、何が正解なのかも分からぬまま、摩擦や衝突を重ねお獅子さまは復活する。

それからさらに時は流れ、仮設住宅から高台へと居を構え、波伝谷で生きることを決意した若者は、改めて当時の地域の混乱と葛藤を振り返ることになる。

学生時代に民俗調査で波伝谷を訪れ、2005年からお獅子さまを撮り続けてきた監督が、ともに迷い、もがきながら、それでも復興に向けて歩み続けた人びとの「願いと揺らぎ」を鮮烈に映し出したドキュメンタリー。

震災が生んだひずみを乗り越え、土地とともに生きていく。2005年から続く12年の記録が実を結んだ震災映画の大いなる到達点。



製作・配給: ビーストリー・プロダクツ 監督・撮影・編集: 我妻和樹 プロデューサー: 佐藤裕美 宣伝: 佐々木瑠都  
2017年/日本/HD/カラー/モノクロ/16:9/147分

2018年2月 ポレポレ東中野ほか  
全国順次公開!

全国共通前売券 ¥1,300

当日一般 ¥1,700 シニア・学生 ¥1,200



ポレポレ東中野

TEL 03 3371 0088  
www.mmjp.or.jp/pole2/  
JR東中野駅西口改札北側出口より徒歩1分  
地下鉄大江戸線東中野駅A1出口より徒歩1分

